

愛に溺れる籠の鳥
～^{あくらつ}悪辣な義兄の執愛～

その小鳥は誘惑するような麗しい声音で啼いていた。

私——菅原悠愛は、うっとりして幸福の象徴である青い鳥を見つめる。

このペットショップは住んでいるアパートから近いので、時々訪れていた。たくさんの種類のペットたちが店内にいるけれど、いつも私はまっすぐに青い鳥のもとへ赴く。

小さな体から紡ぎ出される可憐な鳴き声。澄んだ空の色みたいな羽。ぱちぱちと瞬く、つぶらな黒の瞳。どれもが私の胸を高鳴らせた。

「可愛いなあ……」

この子を飼うことができたなら、どんなに素敵だろう。

けれど籠につけられている値札を見て、私は肩を落とす。

『マメルリハ』という種類のブルーインコはとても高価で、小学生の私には手が出ない。

それに、お母さんにインコを飼いたいと打ち明けて、すでに反対されていた。うちは母子家庭のアパート暮らしなので、ペットを飼うような余裕がないことはわかっていただけれど。

「もし飼えたら、きちんとお世話するの……」

項垂れたそのとき、男の人の声が耳元で囁かれた。

「鳥が好きなの？」

突然のことに驚いて振り仰ぐ。

端正な顔立ちの男の人が、微笑を浮かべて私を見ていた。彼は高校生くらいの年齢だろうか。制服ではないからわからないけれど、私より年上だ。

知らない人に話しかけられ、戸惑った私は身を引いた。するとその人は、ついと私から青い鳥へ視線を移す。

「俺もね、鳥が好きなんだ。きみは、家で飼ってるの？」

彼は愛しげな眼差しを青い鳥に注ぐ。鳥が好きという共通の事柄を見出した私は安堵して、彼と一緒に籠の中の鳥を眺める。

「ううん。飼ってないの。この子を飼いたいけど……」

「お母さんに反対されてるの？」

「そうなの。どうしてわかったの？」

「うちもそうだからさ。ただ、父子家庭だから、父親からだけだね」

「偶然ね。私のうちは母子家庭なの」

「へえ、そうなんだ。俺たちは似たような境遇かもしれないね。きみの名前を聞いてもいいかな？」

俺は池上龍我

好感の持てる、爽やかな笑みが印象的だ。

彼——龍我から名前を明かしてくれたので、私は安心して名乗った。

「私は菅原悠愛。小学六年生なの」

「悠愛か。可愛い名前だね」

私の名前を褒めてくれた龍我は、思いもかけない言葉を継いだ。

「この鳥、俺が悠愛にプレゼントしてあげようか？」

「……えっ？ でも……」

断ろうとした私の気配を察したのか、龍我は制するように私の肩に手を置くと、極上の笑みを浮かべた。

「俺が、悠愛のほしいものをすべてあげるよ」

力強い言葉と彼の笑顔に魅入られ、くらりとする。

それが、のちに私の義兄となる、龍我との出会いだった。



カーテンの隙間から射し込む朝陽さえも、この陰鬱な気持ちは払ってくれない。

腰まである長い黒髪をブラシで梳きながら、私はスタンドミラーに映る自分の顔を見て、重い溜息を吐いた。

大きな瞳は不安そうに濁り、心なしか顔色も悪い。元々白い肌は青ざめていた。唇だけでも血色

良く見せようと、紅いルーージュを引いたのが失敗だった。漆黒の髪と対比する白い顔に、真紅の唇が浮いてしまい、まるで血を嘔ったかのように見える。

「幽霊みたい……。髪が黒のロングだからなおさらよね……」

今から会社に出勤するというのに、こんな貧相な顔をしてはいけけない。

短大を卒業後、就職して三年が経つ。

子どもの頃、両親の再婚により、私には義兄ができた。義父と義兄の住んでいた立派な豪邸に引越し、何不自由ない暮らしを送ってきたけれど、卒業を機に、このアパートでひとり暮らしを始めた。もう社会人になったのだから、実家を出て当然だと思ったのだ。

義父は優しい人で、実子でもない私を甘やかしてくれた。とても良妻とは言えない母にも、惜しめない愛情を注いでくれる。

それに、義兄も……

鏡の向こうに義兄の幻影を見たような気がして、私はぶるりと身を震わせる。

額に落ちかかる黒髪の隙間から覗く、鋭い双眸。口端を引き上げた不遜な笑み。

悪辣さを思わせる微笑には、不思議と惹きつけられる——私の義兄はそんな人だった。

「お義兄ちゃん……元気かしら？」

彼とは三年ほどまともに顔を合わせていない。つまり、私がひとり暮らしをしたときから。

あまりにも過保護でしつこいので、逃げるように引越して連絡を絶つたのだ。義兄も仕事が忙しいだろうし、お互いにもう子どもではない。両親に何かあったら実家で会うくらいでちょうどよ

いのだ。大人になってからの義兄妹の距離感はこのものだろうと思う。

恋人がいるわけではないけれど、寂しくはない。今は仕事だけで精一杯だ。

勤めている会社は大手のアパレルメーカーで、私は総務部に在籍している。雑用やお茶汲みも率先してこなし、仕事にやりがいを感じていた。

だけど、そういった充実した日々が、とあることが原因で次第に壊されていく予感を抱えている。梳いた黒髪をバレッタでひとまとめにし、不安を振り払うようにジャケットを羽織る。白のブラウスの胸元についたリボンの形を整えてから、ふと腕時計に目を落とした。

「あっ、もうこんな時間！ 早く家を出ないと……」

家を出るにあたって、ひとつ不安があるのだけど、怯んでは仕事に遅刻してしまう。慌ててベージュ色のスプリングコートとビジネスバッグを手にし、玄関でパンプスを履いた。

そうつと扉を開けて、外を窺う。

玄関の鍵をしっかりと締め、私は朝陽の射し込むアパートの階段を、周囲を気にしながら音を立てずに下りた。

まさか、朝はいないと思うけれど……

おそろおそろ植え込みの陰を覗いてみるが、そこには誰もいなかった。アパート前の道路を通勤中の人や、車が通り過ぎる。いつもと変わらない、穏やかな朝の風景だ。ほっとした私は、駅の方角へ足を向ける。

不安の原因は、ストーカーの存在だった。私の周囲で、知らない男の人がうろろしているのだ。

帰宅するときに誰かが後ろをついてきていたり、部屋の窓のカーテンを開けたとき、道路脇からこちらを見上げている人影を見かけたこともあった。

植え込みの陰にいたその人物と目が合ってしまったときは、びっくりした。相手も驚いた顔をしていたけれど、すぐに走り去ったので声をかけそびれてしまった。

二十代くらいの細身の男性で、黒縁の眼鏡をかけていた。

私は誰とも交際した経験がないので、別れた前の恋人ということはない。

不審に思うものの、声をかけられたり触られたりという実質的な被害はなかったため、ストーリーとして被害届を出すまでには至っていなかった。彼はアパート周辺にしか出沒せず、会社の近辺やほかの場所で見かけることはない。この辺をうろついているだけなので、本当は私が目的ではないのかもしれない。

「私の気のせいなのかな……でも……」

常に誰かに監視されている気がするのには意味が悪い。理由がわからないから、なおさら。

この辺りにしかストーリーカーが出ないのだとしたら、アパートに問題があるのだろうか。引越したほうがいいだろうか。

大家さんに相談したけれど、迷惑そうな顔をされてしまった。アパートに何かあるのではという言い方をしたのが悪かったのかもしれない。

重い溜息を吐いた私の耳に、列車が車輪を鳴らす規則的な音が届いた。

今から仕事なのだから、頭を切り換えよう。

私は小走りで駅のホームへ向かった。

最寄り駅を出て、急勾配の坂を上れば、勤務する会社のビルが見えてくる。

普段は閑静なビル街だが、今日は何やら様相が違っていた。

「え……何……?」

ビルの玄関前に、大勢の人が詰めかけている。どうしたのだろう。

取材用のカメラを抱えている男性が数人。スーツ姿の女性はマイクを握りしめている。彼らは報道陣だ。取材にしては妙な雰囲気だった。まだ始業時間前なのに。

それに恰幅のよい男性たちが、閉まっている玄関扉に向かって怒鳴り散らしている。

怪訝に思いながらも近づく、それに気づいた彼らが駆け寄ってきた。

「こちらの会社の、従業員の方ですか？」

「は、はい。そうですけど……何かあったんですか？」

マイクを向けられ、困惑してしまふ。

すると、報道陣を掻き分けて、怒鳴っていた男性が割り入ってきた。

「木下社長はどこにいるんだ！ 金を返してくれ！」

「えっ……?」

わけがわからず、目を瞬かせる。

学生のときから聡明だった龍我は、大学生時代に興じた会社を成功させた社長である。輸入販売から始まり、今では自社ブランドを持つアパレルメーカーだ。アパレル関連なので、私が勤めている会社にとってはライバル社と言えた。

私が就職してから三年ほどは疎遠で、ほとんど顔を合わせていない。それなのに、こんな場所で再会するなんて――

オーブンカーで派手に登場した龍我に、報道陣が色めき立つ。

「あなたは……ユーアイ・ファーストコーポレーションの池上社長ですね！ 今回の一件について何かご存じですか？」

龍我にカメラとマイクが向けられる。

ぐい、と私の肩を引き寄せた龍我は一切動揺することなく、冷静に言い放った。

「事実関係については確認中ですので、コメントすることはありません。彼女は私の義妹なので連れて帰ります。失礼」

守るように私の肩を抱いた龍我が歩き始めると、人々は波が割れるかのようにして道を譲った。

オーブンカーに私を押し込んだ龍我は運転席に乗り込み、車を発進させる。

純白の車は華麗なエンジン音を鳴らして、朝のビル街を駆け抜けた。

革張りの座席に身を沈めた私は俯いて、じっと自らの手を見つめていた。

ハンドルを操作する龍我は朝陽が眩しいのか、スーツの胸元に引っかけていたサングラスをつい

と片手で取り、装着する。

「聞かないのか？ 会社に何があったのか」

その声音には呆れた色が含まれている。

龍我は事情を知っているようだ。

「あの人たち、お金を返せだとか、倒産だとか言ってたわよね……」

一社員である私は知らなかったけれど、実は会社の経営状態は悪化していたのかもしれない。思い返すと、理由がよくわからないまま離職する社員が近頃多かった。それに弁護士を名乗る人が社長を訪ねてくるのが度々あったのだ。

龍我は黒髪を風になびかせながら、淡々とした声音で説明する。

「銀行から不渡りが出た。金を返せと訴えていた人たちは債権者だ。デッドラインが今日だということの木下さんは当然わかっていたわけだから、逃げたんだろうな」

「そんな……私、全然知らなかった……」

不渡りとは、小切手や手形が支払期日を過ぎても決済できない状態のことだ。つまり会社の口座にお金がないので、業者への支払いや借入の返済が滞ったのだ。

不渡りの事実が通知され、倒産の危機を知った債権者たちは、お金が回収できなくなるかもしれないと会社に詰めかけたのだろう。

もしかしたら社長を始めとした重役たちは、倒産することを知っていたのかもしれない。だから、会社の玄関に休業の告知を貼っていたのだ。

「倒産するのは、もうどうしようもないの？」

「それは木下さんの対応次第だが、本人が逃げているようでは誰も手を貸さなйдらうな。資金繰りは相当厳しかったらしい。事実上の倒産だろう」

同じ業界なので、龍我は木下社長とも面識があるようだ。

ただ彼が私の職場を訪れたことは一度もない。来られても困る。

義兄がライバル社の社長だなんて、社内の人に知られたらスパイかと疑われるかもしれないからだ。だから私は、龍我と義兄妹であることを隠していた。

龍我の手から逃れ、自分の選んだ場所で仕事をしていたかったのに、まさかこんなことになるなんて想像もしなかった。

ひっそり落ち込んでいると、ふいにこちらに視線を向けた龍我が咎めるように言い放つ。

「だから、俺の会社に入ればいいと言っただ」

「そんなこと言われたって……」

唇を尖らせた私は、座席で体を小さくする。

就職活動をしていた三年前、龍我は私を自分の会社に入るよう促した。それは誘いという軽いものではなく、半ば命令だった。

義兄の会社にコネで入ることに抵抗があつた私は、断つた。いつまでも幼い義妹じゃないのだし、自分で選んだ会社に勤めて、ひとり暮らしを試してみたかったからだ。それに、義兄の過保護からも逃れたかったから……

その結果こうなつてしまい、自分の力が及ばず悔しくなる。

項垂れる私の手の甲に、大きな熱い掌がのせられた。まるで宥めるように。

男の掌の熱さに、びくりと身が竦む。

「お、お義兄ちゃん。ちゃんとハンドルを握つてよ」

「わかつてる」

胸の鼓動が、どきどきと鳴り響く。

昔から龍我はスキンシップが多く、そのたびに私は振り回されてきた。

彼は今でも、私を小学生の義妹として扱っているのだ。

そんなふうにも扱いはいるから、いやなのに――

わかっているとないながら、龍我はずっと私の手を握りしめていた。

最寄り駅で降りしてくれるものと思つただけけれど、車は閑静な住宅街へ辿り着いた。高級そうなマンションのゲートを通り、地下駐車場へ滑り込む。

「え……ここは？」

「俺の家。悠愛が来るのは初めてだな。何度も遊びに来いと誘つたのに」

「だって……大人になってから兄妹が遊ぶのはヘンじゃない？」

「世間の常識に照らし合わせるなよ。俺たちのルールでいいだろ」

「そうだけ……」

私たちは義理の兄妹であり、血のつながりがない。

物心ついてから一緒に暮らすことになったが、俺様気質の龍我は私に対して異常なほど過保護だった。それも本当の兄妹らしくしようという龍我なりの気遣いだったのかもしれないが、私が短大生になる頃にはもう辟易していた。

再会して彼の強引さを目の当たりにすると、会社前での騒動から助けてくれた微量の感謝も泡のごとく霧散する。

駐車場に車を停めて、オープンカーのドアを開けてくれた龍我は、私の腕を取り立ち上がらせる。龍我の自宅に寄るのはすでに決定事項らしい。

けれど無理やり引き摺るようなことはなく、車を降りた私の腰にさりげなく手を添えて、エレベーターへ導いてくれた。

「あの……私、アパートに帰るわ。ひとりで大丈夫だから」

「駄目だ」

即、却下されてしまう。

仕草は優しいのに、口は辛辣だ。

だけど、あのまま会社の前で狼狽していたら、大勢の人に揉まれて怪我をしていたかもしれない。そこを龍我に救ってもらったわけなので、頭が上がらなかった。

少しだけ寄ってから、帰ることにしよう。それにここまで誘うのだから、何か話したいことがあるのかもしれない。

そう思ったとき、エレベーターは最上階に到着した。

ふわふわの絨毯にパンプスを踏み込ませる。廊下にはひとつの扉しかないことから、このフロアは一世帯しかいないらしい。とてつもない高級マンションに初めて訪れた私は、目を見開いて辺りを見回す。

そこで見慣れないものが視界に入り、目を瞬かせる。

扉の前には、精緻な蔓模様の門があった。通常の門は肩くらいまでの高さだと思うが、この門は天井に届くほどで、玄関を覆う丸みのある形状をしている。

まるで、鳥籠のようだ。

マンションでも門扉が付いている物件があるけれど、訪問した人はこの大きさに驚くのではないだろうか。カフェなどでこれと似たデザインを見たことはあるが、圧迫感さほどでもなく、お洒落に感じる。

「変わった形の門ね。こういうデザインもあるんだ」

「この門は俺が考案して特注したんだ。鳥籠の形にしたかったから」

唇に弧を描いた龍我は、鳥籠型の門にかけられた重厚な錠前に鍵を差し込んだ。

古風な仕様は、座敷牢を彷彿とさせる。ただ玄関扉は至って一般的な造りだ。

龍我はカードキーで扉を開けた。彼はドアノブに手をかけると、長い腕を回して私の背を囲い込む。

「どうぞ。落城したお姫様」

「……邪魔します」

嫌味な言い方に唇を尖らせる。

昔から優しくて面倒見のよいお義兄ちゃんなのだけれど、時々意地悪だ。

玄関先の豪華な門構えから予想はしていたが、マンションの室内は驚くほど広かった。

三十畳はあろうかというリビングからは都内の景色が一望できる。

上質な革張りのソファはベッドのように大きい。隣接されたダイニングに置かれている重厚なテーブルは、ひとり暮らしのはずなのに椅子が六脚も備えられていた。天井からは精緻な細工の照明器具が吊り下げられている。どれも一目で高級とわかる調度品ばかりだ。

「すごい部屋ね……。こんなところに住めるなんて、お義兄ちゃんの会社はすごく儲かっているの？」
下世話な質問だったかもしれないけれど、まさか義兄が高級マンションに住めるほどの成功者だとは思わなかったのだ。

「おかげさまで。儲けるといいうのは、そんなに難しいことじゃないんだ」

「はあ……。成功した人の台詞よね」

「惚愛だつて、俺の会社に入れば好待遇で仕事ができるんだ。こういう広い部屋に住みたいだろう？」
どうしても龍我は私を自分の会社に入社させたいらしい。彼は三年経っても諦めていないのだ。

まだ今いる会社が倒産すると決まったわけではないし、気持ちの整理がついていないので、今後のことは考えられない。

「べ、別に……。私は広くなくても、自分が借りたアパートでいいの。静かだし、気に入ってるんだ

から」

「ストーリーカーが出るの？」

「……えっ。どうしてストーリーカーのこと、知ってるの!？」

龍我は意味ありげに口端を引き上げた。

これが私だけに見せる、義兄の悪い顔だ。

精悍な面立ちに悪辣さが加わったその表情は妖しく、蠱惑的だった。

「俺は惚愛のことは何でも知っている。実は、アパートの大家さんに挨拶したときに聞いたんだ。どうして俺に何も相談しないんだ」

私の知らない間に、大家さんに挨拶していたのだ。龍我にはアパートの住所を教えないのに、きつと実家経由で情報を入手したに違いない。

「勝手なことしないで！ お義兄ちゃんには関係ないでしょ」

ストーリーカーのことは、大家さんのほかに友人の莉乃にしか相談していなかった。彼女は中学のときからの親友だ。引越したほうがいいよとアドバイスされたけれど、資金も必要なわけですぐに実行に移せず、今まで迷っていた。両親に話しても、きつと同じことを言われるし、引越し費用を出してほしいと頼んでいるように思われるだろう。そんなつもりはなかった。

まして龍我には知られたくなかった。『ほらみる、俺の言うことを聞かないからだ』と、偉そうに言われるのは目に見えている。

それなのに、アパートの住所ばかりか、ストーリーカーのことまですでに漏れているなんて……

唇を噛んで俯いた私を、龍我は腕組みをしながら、咎めるような目で見据えた。

「俺はな、悠愛のことが心配なんだ。採用された会社は突然の倒産。しかも、手頃だからと住んでみたアパートにはストーカーがつきまといっている。おまえが選ぶものは、ろくなものがない」

「……そうだけど、勝手に調べるなんてひどい」

頼んでもいないのに口を出されるのは気分が悪いものである。私は弱々しい声で文句を口にした。そんな私の反応に眉を跳ね上げた龍我は壁に手をつけて、私の体を囲い込んだ。

彼は一八四センチあるので、上から覗き込まれるような格好になる。

鋭い双眸が不遜さを込めて、私を射竦めた。

「俺はおまえの義兄だぞ。何かあつてからじゃ遅い。あのアパートにはもう戻るな。悠愛はこれから俺と一緒に、このマンションで生活するんだ。いいな？」

命令のように念を押されて、私は瞠目した。そんなことを急に決められても困る。

龍我は何かと強引に事を進めようとする気質があつた。それは十年来の付き合いで察している。強いリーダーシップの取れる社長業にはびつたりかもしれないけれど、私には時々窮屈に感じてしまうのだ。

そのため、こうして反発心が湧き起こるときがある。

「そんなこと、お義兄ちゃんが勝手に決めないで！ 戻るなつて言われても、荷物はどうするの？」

「すべて俺が手配するから、悠愛はここにいろ。俺を勝手に罵るが、悠愛が至らないからこんな状況に陥るんだぞ。トラブルが起こらなければこんなことはしなかった。ろくでもない事態になつた

ら家族が迷惑する。それは困るだろう？」

倒産騒ぎやストーカーの問題は私が引き起こしたわけではないけれど、家族に迷惑をかけるのは本意ではない。できれば両親には何も知らせたくなかつた。

龍我に説得され、私は渋々頷いた。

しばらくは彼の言うとおり、このマンションで暮らすしかなさそうだ。

「……わかつた。お義兄ちゃんと、ここで暮らす……」

小さな声で了承すると、笑みを浮かべた龍我はようやく壁についていた手を下ろした。

「それじゃあ、悠愛の部屋に案内するよ」

思いがけないことを告げられて、私は目を瞬かせる。

「……えっ？ 私の部屋があるの？」

「そう。悠愛のために用意しておいたんだ」

龍我は私の背に手を添えて促した。空いている客間があるという意味かもしれないと思ひ直した私は素直に従う。

リビングから廊下へ出ると、いくつかの扉が並んでいた。

「この奥の扉は俺の寝室。隣が悠愛の部屋だから」

開け放たれた部屋を一目見た私は、奇妙な既視感に襲われて、くらりとする。

窓にかけられたピンク色のカーテン。向かって右手に置かれたベッド。左側には白木造りの机と椅子が鎮座している。机の隣には肩くらいの高さの白い本棚が設置されていた。

「この部屋……実家の私の部屋と全く同じ配置じゃない？」

「そうだな。このほうが悠愛が安心できるかなと思って、同じにしてみたんだ」

私と龍我が独立したので、都内の実家には両親が住んでいる。実家とは言うが、正確には義父と前妻の息子である龍我が住んでいた一軒家だ。そこに再婚した母と私が移り住んだのだった。

狭いアパートから豪邸のような一軒家に引越し、しかも自分の部屋まで用意されていたときには、素晴らしい待遇に驚いたものだ。

もう十年前のことになるけれど、あのとき感激したことは今でも鮮明に覚えている。

今、このマンションにある家具は当然、実家の部屋に置かれたものと同一ではない。当時の私は小生だつたので、ベッドも勉強机も子供用だった。この部屋の家具は大人が使用するサイズのものだ。

龍我が、私が安心するようにと気遣ってくれたことは嬉しい。

だけど私の脳裏にはなぜか、蜘蛛に搦め捕られる蝶の姿が浮かんだ。

私はいつまでも、龍我の束縛から卒業できないのだ。そのことを、この部屋が象徴していた。

龍我は現在二十七歳だ。結婚していてもおかしくない年齢の義兄が、義妹のために子ども部屋と同じ部屋を用意するのは、異常ではないだろうか。それとも、これも家族としての優しさの範疇に入るのだろうか。

大人になり財力を手にした義兄はこれだけに留まらない気がして、空恐ろしくなる。

困惑する私の心中など知らず、龍我は腕時計を見やる。

「俺は会社に戻る。朝からショックを受けただろうし、悠愛は部屋で休んでいる。あとで美味い飯

を買ってきてやるから、マンションから出ずに大人しくしてろよ。何かあったら、ここに連絡するんだ」

ジャケットの胸元から黒革の名刺入れを取り出した龍我は、一枚の名刺を引き抜いた。

その裏面に、ペンでさらりと電話番号を書き込む。

受け取った名刺には、龍我の携帯らしき電話番号が滑らかな書体で記されていた。裏返すと、

『株式会社ユーアイ・ファーストコーポレーション 代表取締役 池上龍我』とある。

龍我の名刺をもらったのは初めてだ。

何かあれば両親に聞けばよいので、連絡先を訊ねたこともなかった。

「……ありがと。仕事中は迷惑になるから極力かけないけど、一応持っておくわ」

そういえば、ひとり暮らしを始めるとき、龍我は私に連絡先を教えろとしつつこく訊ねてきたことがあった。

あのときは、もう子どもじゃないのにと突っぱねただけで、今思えば、龍我は私が社会人として頼りないことを見越していたのかもしれない。

落胆した私の肩に、大きな掌がそっとのせられる。

「遠慮しないで、いつでも連絡してきていいんだ。悠愛は、俺の大切な義妹なんだから」

私に向けられた龍我の双眸が、愛しいものを見守るかのように細められる。

その愛情に反抗するなんて、いけないことかもしれない。

名刺を手にした私は、曖昧に頷いた。

物心ついた頃には、私は母とふたりきりで暮らしていた。

狭いアパートは微臭く、隣の部屋から響く物音がうるさい。仕事が忙しい母はいつも派手な化粧をして出かけては、私に新しい彼氏の話をした。

「今度、悠愛にも会わせてあげるわね。悠愛も新しいお父さんがほしいでしょ？」
幾度となく吐かれた定型文に、私はいつもどおり頷く。

お母さんの男癖が悪いから離婚したのだろうな……と、小学生のときにはすでに察していた。けれど、毎回母の恋愛は長続きせず、新しいお父さんとして誰かを紹介されることは一度もなかった。

これからもないのだろうと思いついていた矢先、思いがけないところからきっかけが舞い込む。偶然ペットショップで知り合った男の子の父親が、母を見初めたのだ。

豪華なレストランに招待されて食事をしたとき、母はその場で交際を申し込まれた。

紳士的で優しく、物腰が柔らかいその男性は会社の役員をされており、前妻には病気で先立たれたのだという。

わずか一か月後、母は結婚した。

互いに再婚なので式は行わず、親戚とも疎遠だから家族だけでお祝いするという形だった。

新しい家族となった義父と義兄が住む家に同居するため、私たちはアパートから引っ越した。辿り着いたのは、広い邸宅。

ランドセルを背負い、学用品のみを携えた私は啞然とした。

新しいお義父さんが、まさかこんなにお金持ちだったなんて。

母は誇らしげに豪奢な邸宅を見上げた。

「あたしたちはシンデレラよ！ もう二度とあんな惨めな生活はしなくて済むわ。これも、お母さんの美貌のおかげね。嬉しいでしょ、悠愛」

「う……ん……」

浮かれる母に苦笑を返す。母も義父がこのような豪邸に住んでいることを初めて知ったのではないだろうか。何しろ知り合って一か月しか経っていないのである。

ともあれ、もう再婚したわけだから、母は幸せになってくれるはずだ。

新しい住まいとなる家の玄関を開けると、義父が笑顔で出迎えてくれた。

「いらつしゃい、冴子。悠愛ちゃん。荷物はどうしたんだい？ トラックを手配すると言ったのに、君という人は断ってしまうんだからね。私にも引っ越しを手伝わせてほしかったよ」

「本当にいいのよ、柊司さん。手荷物以外は宅配便で送ったの。ほら、母子家庭だから物がないのよ」

古い家具はすべて捨ててきた。服や靴も、貧乏人だとわかってしまうような安っぽい品物はすべて。高価な物などないので、残ったのは手荷物とわずかな着替えくらいである。

あの古い木造アパートに義父を招いたことは無論ない。引越しの手伝いを断つたのも、今まで
の生活を見られたくないからだろう。

それを察した私は黙っていた。

足を踏み入れた豪華な玄関はとても広く、こだけで住んでいたアパートの部屋くらいはある。
驚いて見回していると、龍我が階段を下りてきた。

眩しいほどの純白のシャツを纏い、微笑みを浮かべている彼は颯爽としていて、まるで王子様の
ようだ。

「悠愛の部屋に案内するよ。ランドセルを置いてこようか」

「え……私の部屋……？」

龍我とは何度か両親を交えて顔を合わせているので、もう気心は知れていた。

義父と同じく、親切で優しい龍我に好感を持たないわけがない。彼が義兄になってくれたことは
とても嬉しかった。

私は龍我に連れられて階段を上り、二階へ赴いた。

「こっちが俺の部屋。そしてここが、新しい悠愛の部屋だよ」

龍我的手により、扉が開かれた。

眼前に飛び込んだできた光景に、私は感嘆の声を上げる。

「わあ……！」

ピンク色のカーテンに、真新しいアイボリーの絨毯。右側にはベッドがあり、その反対側に勉強

机と椅子、その隣には本棚まで設置されている。家具はすべて白で統一され、どれもが新品だ。

一間のアパートでは自分の部屋なんてなかったから、隅に小さな衣装ケースを置いて、そこに着
替えのすべてを詰め込み、ケースの上にランドセルと勉強道具を重ねて置いていた。

それなのに、まさかこんなに豪華な部屋を用意してもらえるなんて思ってもみなかった。まるで
本物のお嬢様になったみたいだ。どきどきしながら背負っていたランドセルを下ろし、傷ひとつな
い勉強机に置く。

「すごい……ここ、私の部屋なの……？」

「そうだよ。家具もカーテンも、全部俺が選んだものなんだ。やっぱり女の子らしく、可愛いデザ
インがいいかなと思ってるね。気に入ってくれた？」

「もちろんだよ。ありがとう……お、お義兄ちゃん……」

おずおずと、『お義兄ちゃん』と口にする。

今日から私たちは家族になるのだ。そして私と龍我は、義兄妹になる。

三歳年上の龍我は中学三年生だから喧嘩にはならないと思うけれど、義兄妹として仲良くやって
いきたい。

私の台詞に、龍我は感激したように目を見開いていた。

「お義兄ちゃん、か……いいね。俺たちは今日から義兄妹だものな。これからは、俺が悠愛を守る
からな。ずっと、俺が傍にいるよ……」

そう言って蕩けるような笑みを浮かべた龍我は、私の頭を優しく撫でた。

引っ越ししてきたその日の夜、ささやかなパーティーが開かれた。

チキンやピザなどのご馳走が並べられ、ホールケーキまで用意されている。

こんなに豪華な食卓は生まれて初めてだ。まるでお伽話の世界に迷い込んだみたい。

今までクリスマスや誕生日のお祝いなんてしたことなかった私は、ご馳走の並べられたテーブルが煌めいて見えた。

「すごい……ごちそうだよ、お母さん！」

「こら、悠愛。はしゃがないの」

喜ぶ私を目にした義父は鷹揚に笑った。

「今日は引っ越し祝いだからね。簡単なものを注文したんだが、そんなに喜んでもらえるなんて嬉しいよ」

「ありがとう、柊司さん。明日からはあたしが作るわね。料理は得意なのよ」

「できる範囲でいいんだよ。冴子と結婚したのは、家政婦にするためじゃないのだから」

「まあ、そんな」

家政婦ではないと言われた母は嬉しそうだ。

母が料理をする姿なんて見たことがないので大丈夫だろうかと心配になったけれど、明日からの母は時間がある。お金持ちの奥様になったのだから、もうお店に出勤しなくてもよいのだ。

私の隣に腰を下ろしていた龍我は、意味ありげな笑みを浮かべている。

両親の微笑ましいやり取りが終わったのを見計らい、彼は私のほうを向く。

「引っ越しを記念して、悠愛にプレゼントがあるんだ」

「プレゼント？ 私に？」

プレゼントなんていうものを一度も受け取ったことのない私は驚いてしまう。

席を立った龍我は、ダイニングを出て行った。品物は別室に置いていらしい。

ややあつて戻ってきた彼は、白い布のかけられた大きな箱を抱えていた。

「えっ……何だろう？」

龍我がテーブルに箱を置いたとき、ばさりと中の物が動く音がした。

みんなが注目する中、龍我は白い布を取り去る。

「さあ、これが悠愛へのプレゼントだよ」

私は息を呑んだ。

さらりと払われた布から現れたのは、鳥籠に入った青い鳥だった。

龍我と初めて会ったときにベットショップで見たと、『マメルリハ』という名のブルーインコだ。

「この子……あのときの……？」

「そうだよ。俺が買ってあげると約束しただろう？ 悠愛に喜んでもらいたかったから、俺の小遣いで買ったんだ」

プレゼントが生き物だと知った母が眉根を寄せた。母は動物が嫌いなのだ。

「ちょっと待ってちょうだい。悠愛にはベットの世話なんてできないわ。学校があるんだから忙しいで買ったんだ」

いし、飼っちゃダメって前から禁止してたのよ」

「俺と一緒に面倒を見るよ。悠愛が世話を投げ出しても、責任は俺が持つ。それならいいだろ？ 冴子さん」

母の反対を予期していたかのように、龍我は曇みかけた。

『お義母さん』とは言わず、なぜか名前を強調する。龍我としては、すぐには母親だと認められないという主張なのかもしれない。

母は子どものように唇を尖らせた。

「でも……面倒見るなんて、きつと初めだけだわ。どうせ飽きるに決まってるわよ」

「決めつけるのはよくないんじゃない？ 冴子さんが父さんと結婚することも、悠愛が生まれたときには決まっていなかったわけだし。未来ってさ、どうなるかわからないよね」

痛いところを突かれた母は俯いて黙り込んだ。

私が生まれた頃はきつと、実の父と母は仲がよかつたのだ。そのときは別の人と再婚するなんて考えもしなかつたに違いない。

義父は怒った顔をして龍我をたしなめる。

「過去のことを持ち出すのはやめなさい、龍我。冴子は女手ひとつで悠愛ちゃんを育てたんだぞ。それはとても苦勞を強いられることなんだ」

「わかっている。俺が言いたいのは、小鳥の世話はちゃんとできるといことだよ。悠愛を立派に育てた冴子さんなら、理解してくれるんじゃないかな」

全く悪びれない龍我は大人の意見を逆手に取る。

いづれ私が小鳥の世話を投げ出すとみんなは考えているようだけれど、そんなことをしたら小鳥は死んでしまうかもしれない。とてもほしかつた小鳥なのだから、絶対に死なせたりしない。龍我と一緒に面倒を見ると言ってくれたことが心強く、ずっと大切に飼い続けようという決意が私の胸の裡に湧いた。

私は、おぼえずと自分の考えを口にする。

「きちんと小鳥のお世話をするから、飼ってもいいでしょう？ お願ひ、お母さん。お義父さん」
「そうね……ちゃんとできるならいいけど……柊司さんはどうかしら？」

母はちらりと私を見たあと、義父の顔色を窺った。

「インコくらいは許してあげてもいいじゃないか。義兄妹が仲良くするきっかけになってくれるだろう」

義父は年上らしい寛容さをもって、母に答えた。髪に白いものが混じる義父の年齢は、母よりもかなり年上であると聞いている。

ピロロ……と、籠の中の小鳥が流麗な音色を奏でる。

目を細めた龍我は、真鍮の鳥籠の取っ手を悠々と掴んだ。

「それじゃあ、このインコは新しい家族の象徴として、俺と悠愛が協力して飼うから」

『新しい家族の象徴』とされた青い鳥は、その瞬間から家族の一員となった。

私は、青い鳥を連れて行った龍我のあとを追ひ、二階にある龍我的自室に入った。

モノトーンで纏められた部屋で、ベッドの傍にサイドテーブルが設置されている。その上に、龍我は鳥籠を置いた。

「俺の部屋に鳥籠を置いておけば、冴子さんも勝手に入ってこられないよ。学校に行っているときは部屋に鍵をかけるからね」

私たちがいない間に、母が小鳥を捨てる可能性が消えたことに安堵した。改めて鳥籠の中の青い鳥を、じっくりと眺める。

ふわりとした毛並みが青々と輝いていて美しい。小鳥は初めての場所に驚いたように、ぱちぱちと瞬きを繰り返している。やがて小さくさえずり、可愛らしく啼いてくれた。

「ありがとう、お義兄ちゃん……。最高のプレゼントだよ」

どうせ飼えないと諦めていた小鳥を、まさか人生で初めてのプレゼントにしてもらえるなんて思わなかった。

感激に胸を震わせる私の隣に並んだ龍我は、ともに籠の中の鳥を覗き込む。

「悠愛のほしいものは、何でも俺がプレゼントしてあげると決めたからね」

「何でもだなんて……。この子だけで充分だよ」

「欲がないんだな。服とかアクセサリーとか、ほしいものたくさんあるだろ？」

そう言われて、私は毛玉のついた自分の服を見下ろした。

これがかつともまともなワンピースだったので着てきたのだけれど、胸元のリボンほつれ、白い生地は薄汚れてしまっている。

お姫様のような衣装を着てみたいという憧れを抱いている。

けれど、あれもこれもと欲深く望んではいけない。望みを叶えた代償を支払わなければならなくなるから。

そのことを私は弱者の本能として知っていた。

「ほしいものなんてないよ。だって、お義父さんとお義兄ちゃんがいてくれて、この家に住むことができるんだから」

そう口にした私は、もうすべて願いを叶えてしまったことに気づかされた。

新しい家族、広い邸宅、自分の部屋。そして、ほしかった青い鳥。

それまで不幸という荷物を当然のように背負っていた私は、分不相応な幸福を手に入れたのだ。

我が身に訪れたこの幸運は、降って湧いたものだろうか……

奇妙な違和感に襲われ、ごくりと唾を呑み込む。すると、龍我は自然な所作で私の肩を引き寄せた。

体が密着して頬がくつつけられるが、龍我の双眸は変わらず小鳥に向けられている。

もう家族なのだから、このくらいのスキンシップは義兄妹として当たり前なのかもしれない。

「俺の言うとおりにしていれば、悠愛はずっと幸せな女の子だ……」

義兄の唇から紡ぎ出された低い声音に、なぜか胸がざわめく。

そのとき、階下から母が呼ぶ声が聞こえてきた。私は食事の最中だったことを思い出し、身じろぎをする。

龍我は抱いていた肩を離すと、明るい笑顔を見せた。

「お腹が空いただろ。鳥の名前は家族で相談して決めようか」

こくりと頷くと、すいと手を握られた。

同級生の女の子とは全く感触が違う、熱くて大きな、男の人の掌だ。

優しくて頼もしいお義兄ちゃんにいの存在に、私は一抹いちまうの不安を払拭はらひきした。

両親の再婚から一年が経過し、私は龍我と同じ学園の中等部に進学した。

ところが入学当初から、注目を浴びることになってしまう。

『池上龍我の義妹』という肩書きを持った私は、どこへ行っても好奇の目を向けられるのだ。義兄が大変な有名人であることを、入学して初めて知らされる。

それは龍我の外見と、その行動によるものだった。

すらりと背が高く、秀麗な顔立ちをしている龍我は、女子の間で絶大な人気を誇っていた。何度も告白されているにもかかわらず、彼は誰とも付き合おうとしない。そのことが、より女性の心を燃え立たせるらしい。

私は、そんな義兄と毎日必ず一緒に登校している。龍我が校門をくぐると、待ち構えていた高等部の女子たちが手紙を差し出してきた。

「池上君、おはよう。これ……」

「いらぬら」

一瞥いちげつもくれずに龍我は吐き捨てる。

さらに足を止めようともせず、そのまま女子の前を通り過ぎてしまった。

私が振り返ると、彼女たちは手紙を握りしめたまま校門に佇たたくんでいた。

「お義兄ちゃん……受け取ってあげてもいいんじゃない？」

「どうせ読まないから無駄だよ」

こういったことは日常茶飯事にちじょうさはんじだった。冷たくあしらわれても、龍我に告白する女性はあとを絶たない。

誰とも交際する気がないのか、それともほかに好きな人がいるのだろうか。龍我は一切、自身の恋愛観について語ることはなかった。

「授業が終わったら迎えに来るから、勝手に帰るなよ」

「わかってるから」

中等部の昇降口までわざわざ送り届けてくれるのは日課で、帰宅するときも必ず龍我と一緒に帰らなければならないと決められていた。義妹が危険な目に遭ったら大変だからというのが、龍我の言い分だった。

教室へ向かうと、同じクラスの莉乃が話しかけてきた。

「おはよう。悠愛のお義兄さんにいって、すごい過保護だよね。まだこっち見てるよ」

振り返ると、龍我は昇降口たかすに佇み、こちらを見据えていた。

校内で危険なことなどないだろうし、放課後になればまた会えるのに、なぜそんなに監視するの

かと首を捻る。

「過保護すぎて困っちゃうよ……。いつも私にくっついてるんだもの」

「あはは。傍から見たら悠愛がお義兄さんにくっついてるんだけどね」

そんなふうに見えてしまうのだろう。莉乃が笑う隣で、かくりと肩を落とす。

龍我とは義兄妹というせいもあるのだろうか。喧嘩になったことは一度もない。それどころか勉強を見てくれて、休日も一緒に買い物に出かける。ひどく甘やかされて窮屈なほどだ。

友達とも遊びたいのに、龍我が離れないのでそれも叶わない。

いっそ彼女ができたら私にべったりしなくなるのかもと思うが、龍我が恋人を作ることとはしばらくなさそうだ。何しろ、手紙に触れることすらしないのだから。

「おはよう、悠愛ちゃん」

「おはよう」

教室の入り口でクラスメイトの女子と挨拶を交わす。

同じクラスの彼女はアイドルみたいな美少女で、男子たちの憧れの的だ。

その後いつもどおりに授業を受け、放課後になった。

ホームルームを終えたクラスメイトたちが帰り支度を始めると、教室の一角に女子たちが集まっていた。

みんな気の毒そうな顔をして、項垂れているひとりの女子を慰めている。彼女は朝、私に挨拶してくれた子だ。何かあったのだろうか。

莉乃が私の席へやってきて、声をひそめた。

「彼女さ、悠愛のお義兄さんに告白したらしいよ」

「えっ!?!」

思わず大きな声を出してしまい、私は慌てて口元を押さえる。

朝は朗らかに挨拶を交わしたけれど、まさか義兄に告白するつもりだったなんて思いもしなかった。

「お昼休みときに高等部に行ってみたみたい。……で、フラれたんだって」

「……そうなんだ。全然知らなかった……」

やはり龍我はすげなく断つたのだろう。アイドルのように可愛い彼女ですら想いは通じなかったのだ。

莉乃は机に頬杖をつき、組んだ足をぶらぶらとさせていた。

「悠愛のお義兄さんってさ、難攻不落だよ。いったい誰となら付き合うの?」

「さあ……」

私がそう答えたとき、突然教室の空気が凍りつく。

何だろうと、私はみんなが視線を向けた戸口に首を向けた。

「悠愛。帰るぞ」

龍我は尊大な態度で私に呼びかけた。

いつもは校門で待ち合わせているのに、話し込んでいたから教室を出るのが遅れた。慌てて鞆を

抱えた私は席を立つ。

振ったばかりの女子がいる教室を堂々と訪ねてくる龍我の豪胆さに、クラスのみんなは驚いているようだ。

私は周囲の視線から逃れるように、小走りで教室を出た。龍我は長いストロークで焦ることなく後ろをついてくる。

「そんなに慌てなくていいだろ。どうしたんだ」

あの教室の雰囲気、理解できなかったのだろうか。

告白を断るのは何でもないことだともいうように、龍我は平静な態度だった。

眉をひそめた私は、隣に並んだ龍我に小声で問いかけた。

「……お義兄ちゃん。私と同じクラスの女子に告白されて、断ったんだよね？」

「ああ。そういえば、あの女は悠愛と同じクラスだったな。何か言われた？」

龍我はそう言っ、ぎらりと目の奥を光らせる。

彼は私のことになると、いつも獲物を狩る獣のような執拗さを見え隠れさせた。

なぜだろうと思いつつ、首をゆるりと横に振る。

「ううん、何も。……彼女、泣いてたみたいだよ」

「友達への同情か。悠愛は優しいからな。いつものことだから、おまえは気にしなくていい」

龍我は可愛い女子に全く興味を抱いていない。まるで路傍の石のような扱いだ。

「お義兄ちゃんは どうして、告白を断ったの？ ううん、彼女だけじゃなく、どうして誰とも付き

合わないの？」

誰もが同じ疑問を抱いているに違いなかった。

私が純粋な疑問をぶつけると、龍我は悪辣な笑みを浮かべる。まるで、悪巧みが成功したかのよう。

「俺は悠愛と一緒にいたいんだ。何しろおまえは、俺の義妹なんだから」

私たちは最高の免罪符を手にした。

それは『義兄妹』という名の札だ。家族なのだから、その絆は何よりも強固に結ばれるべきであり、いつも一緒にいて然りということになる。

その理屈に奇妙な歪みを覚えるのだけれど、龍我は自然と私を優先させるので、無理をしているようには見えなかった。彼が納得しているなら、それでよいのだろうと思える。

「お義兄ちゃんが嫌じゃなければいいけど……」

「嫌なわけないだろ。わかってないな」

龍我は軽やかに笑った。とても楽しそうだ。

帰宅した私たちは、まっすぐに二階の龍我の部屋に赴く。

部屋の鍵を開けて入室すると、青い鳥は綺麗な声音で迎えてくれた。

「ただいま、メル」

メルと名付けた小鳥は、学校へ行っているときは必ず龍我の部屋に入れておく。

帰宅したら鳥籠の脇で、ふたりで勉強するのが日課だ。

艶めいたメルつやめいたの青い羽を見つめると、心が落ち着く。流麗な蔓模様の鳥籠つるもようとりかごも素敵なデザインで、美しいメルにお似合いの家だ。すべて龍我からのプレゼントだった。

ふと、メルを眺めている私の肩が、ぎゅつと抱かれる。

鳥籠の中を見つめる龍我の厚い胸板が、肩に押しつけられていた。

「メルは幸せな鳥だな」

「え？ 幸福の青い鳥だから？」

龍我は喉奥から笑いを零した。そんな仕草をする彼はひどく大人びて見える。

「幸福の青い鳥は伝説だよ。そうじゃなくて、あのままペットショップで売れ残っていたら、今頃は処分されていたはずだ。悠愛がメルを気に入ったおかげで、こうして恵まれた環境で飼われているんだから、こいつは幸せ者だって意味だよ」

処分……という言葉が私の胸に重く響いた。

ペットショップでは当然、値札をつけられた動物たちが売れ残る場合もある。そのときは、どうするのだろうか。考えてみたこともなかった。

龍我の大きな掌が、私の肩を撫で下ろす。もう片方の手は、慈しむように髪を撫でた。

龍我が毎日、猪毛のブラシで手ずから梳いてくれるので、髪は艶めいている。

手櫛で私の髪を梳いた龍我の指が、まっすぐな黒髪を捌め捕った。

「だからメルは、選ばれた幸運な鳥だ。悠愛のおかげだよ」

「……そうだね」

龍我の言うことは、正論だ。

それは私自身の境遇にも当てはまることかもしれない。

幸運なのは、メルか、それとも私か。

龍我が髪をもてあそぶ感触とともにそんなことを考えながら、私は青い鳥を見つめていた。



広いマンションでぼんやりとテレビを眺めていると、昔のことを思い出してしまった。

両親の再婚により、それまでの貧乏な暮らしが一変して、私は裕福な家のお嬢様として幸せに過ごせた。

それも、青い鳥のメルが幸福を運んでくれてくれたおかげだと思っている。

そのメルは、私が短大生のときに亡くなった。

とても可愛がっていたので死なれたときは哀しくて、もう次の小鳥を飼おうという気にはなれなかった。メルメルの遺体は、私がひとりで庭の隅に埋めた。

メルとの思い出に浸っていると、ニュース番組で私が勤めていた会社のことが報道されていた。

弁護士によって倒産の手続きが開始されたいらしい。事件ではないためか世間での注目度は低いよう
うで、すぐに別の話題に切り替わる。先程会社を訪れた私の顔が映されることはなかったので、小
さく安堵の息を零した。

だけど、会社が倒産したということは、私は職を失ったのだ。やはりショックだった。リモコンを操作してニュースを消すと、広いリビングが途端にしんと静まり返る。

優しく体を受け止めてくれる革張りのソファは極上の座り心地だけれど、私は所在なさに身じろぎをした。

『悠愛はこれから俺と一緒に、このマンションで生活するんだ』

先程、龍我から告げられた台詞が耳奥で繰り返される。

強気な龍我に押されて、つい了承してしまったけれど、まだ頭の整理が追いついていない。

それに義妹と同居して、龍我は困らないのだろうか。

恋人がマンションを訪ねてきたときに私がいいたら、誤解しないだろうか。

学生の頃の龍我は恋人を作らなかつたけれど、現在は誰かと交際していてもおかしくない。

むしろ、今も誰とも付き合っていないほうが不自然だろう。若くして成功した会社社長なのだから、数多の女性が恋人に立候補するはずだ。

「お義兄ちゃんの恋人ってどんな人なんだろう……。きっと綺麗な大人の女性で、大会社の令嬢

だったりするのよね……」

私は早くも義兄の恋人と鉢合わせをしたときに備えて、どう説明しようかと考えた。

けれど、すべては想像に過ぎない。頭を振って立ち上がり、先程案内された私の部屋へ入る。

実家と同じ雰囲気の内室を改めて見回した。

家具やカーテンなどはすべて新品で、使用した形跡がない。クローゼットを開いてみると、そこ

には数々の衣装がハンガーに吊り下げられていた。繊細なリボンとフリルで彩られたデザインは、まるでお姫様が着るドレスのようだ。

「わあ……可愛い。このワンピース、お義兄ちゃんの会社がプロデュースしてるブランドだわ」

個人バイヤーから始まった龍我の会社は、今では自社ブランドを手がけており、全国にアパレルショップを展開している。中でも、お姫様をコンセプトにしたブランド『ラブ♡プリンセス』は女性の人気を博していた。

『ユーアイ・ファーストコーポレーション』といえば、『若手経営者の池上龍我』がすぐに出てくるほど注目を浴びている。龍我が女性誌のインタビューに掲載されている記事を、私は何度も目にしてきた。

純白のスーツ姿で雑誌に載っている龍我はまるで人気俳優のような抜いだ。それだけ彼の美貌も注目されているということなのだろう。インタビューのテーマも会社経営よりは、龍我の恋愛や結婚観に関するものが多い。

ただ、その回答は当たり障りのないものばかりだった。好きな女性のタイプは内面を磨いている人だとか、理想の結婚は笑いが絶えない家庭だとか、どこかで聞いたことがあるような模範解答だ。

唯一、首を捻った答えは、会社名について。

ふと、私はポケットに入れた龍我の名刺を取り出した。

「ユーアイ・ファーストコーポレーション……」

雑誌のインタビューで会社名の由来を問われた龍我は、『初恋の人の名前です』と答えていた。

龍我の初恋の人が誰なのか、もちろん私は知らない。

学生の頃はどんな可愛い子にも見向きもしなかった彼が、心の裡では誰かに想いを寄せていたなんて、想像もしていなかった。

「ユーアイ……ユーア、ユア……あれ？」

私の名前に響きが似ているが、似たような名前の人が初恋の人ということだろうか。記憶を辿ってみても思い当たる人はいない。

わからないものは仕方がないと、私は頭を切り替えるべく華やかなワードローブに目を戻す。「ちよつと試着してみようかな。ラブプリのワンピース、ずっと憧れてたのよね」

龍我がプロデュースしているブランドということは知っていたけれど、とても高価なので購入したことはなかった。それにデートなどしたことがないので、着ていくところがない。

まるでショップのごとくずらりと並んだワンピースやコートの中から、最新作らしき水色の服を取り出す。

胸元が大きく開いたワンピースは、ふわりとしたシフォンが広がるAラインのデザインで、裾はアシメントリーに彩られている。光の加減によりキラキラと輝く素材も相まって、人魚姫を彷彿とさせる艶やかさを醸し出していた。

私は会社用の地味なスーツを脱いで、水色のワンピースに着替えてみた。

こんなに華麗な服は結婚式の二次会くらいしか着ていけないだろうけれど、誰も見ていないから、ちよつとだけ。

それに、龍我がどんなことを想いながら女性の服を考案しているのか気になった。

初恋の人に似合う服……ということなのか。

水色のワンピースに袖を通した私は、室内にあるスタンドミラーに映して確認する。すると、そこにはお洒落な服を着て緊張気味の私の姿があった。

ふいに、見覚えのある少女の姿が脳裏をよぎる。

「あれ？ これって……」

まるで昔の私のような姿だ。

否、私の着ているワンピースが当時、龍我がプレゼントしてくれた服に似ているのだ。

龍我が義兄になってからというもの、彼は小鳥に始まり、私に様々な贈り物をくれた。その中には服やアクセサリ、下着まであった。それこそ、クローゼットが溢れてしまうほどに。

まるでお姫様のような煌びやかな服は、高価に違いない。

私には分不相応な気がするし、龍我のお金を使わせるのも悪いので断ると、「冴子さんが悠愛の服を買ってきてくれないんだから、仕方ないだろ」と返されたことがある。

母は結婚するとすぐに飲み歩いたりして、ろくに私に構わなかった。以前からそうだったので、やはりホステスの仕事を辞めても母は変わらないのかな……と諦めていたけれど、ひとつ気になることがあった。

遊びに出かけようとする母に、龍我がさりげなく話す声が聞こえたのだ。

『冴子さん、悠愛の服は俺たちふたりで買いに行くから、冴子さんは自分の服だけ買ってね』

『そう？ でも、お金はどうするのよ。じゃあ、お小遣い渡すから……』
『いらぬよ。俺、家庭教師のバイトしてるから。義母から小遣いもらうほど子どもじゃないんだよね』

『な……なによ、その言い方。龍我はまだ高校生でしょ』

『あなたより精神年齢は大人だよ。それから、夕飯は俺が作るから、妙な気を使って帰ってこなくていいからね。父さんには俺からうまく言っておくから、冴子さんは彼氏と好きなように遊んできてよ』

まるで子どものようにむくれた母が玄関を出て行く音を、私は偶然トイレで聞いていた。

龍我はあえて、母が私の面倒を見ることを遠ざけているのだ。

家にはないことを推奨してすらいるように思える。

そうすると、私はいつそう龍我とふたりきりで過ごし、彼の買ったものに囲まれる生活になる。

義兄の選んだ服を着て、ブラシで黒髪を梳すってもらいながら、甘やかに紡がれる低い声を聞き、勉強を教えてもらう際には手が触れて――

支配されている……

そう感じたとき、ぞくりと背筋に戦慄せんりつが走った。

当時は、龍我と母の仲が悪いゆえだと思っていたけれど、大人になった今、初めて彼の意図を理解した気がする。

龍我は、私を自分好みの義妹に仕立て上げたかったのかもしれない、と。

けれど龍我は暴君ではなく、どこまでも私に優しくかった。それだけ龍我は義兄としての責任を果たさなければと重く感じていたのだ。母に対する不遜ふそんな態度も、実母の思い出を消したくないという思いがあったからかもしれない。

龍我の亡くなった実母は聡明な良妻で、おしどり夫婦と呼ばれていたのだと、近所の人々がわざわざ教えてくれたことがある。きっとお金持ちの奥様として相応ふさわしい女性だったのだろう。私の母はともそのようなタイプではない。龍我が新しい母として受け入れられないのは道理だ。

それでも今まで、家族としての形を保っていた。

私は重苦しい思いを抱えつつ、水色のワンピースを脱いで、もとのスーツに着替えた。

「ラブプリのデザインは、龍我の好みが反映されているのね……。私にさせていたワンピースからヒントを得たのかも」

ワンピースをハンガーにかけてワードローブに戻すと、今度は引き出しを開けてみる。

予想したとおり、そこには数々の下着が整然と並んでいた。

ショーツにブラジャー、キャミソールと、あらゆる種類の下着が揃っている。いずれも緻密ちみつなレースで彩いろどられた有名メーカーの高級品だ。彼氏ができた経験もない私は、こんなお洒落しゃれで上質な下着を手にしたことはない。

「こんなにたくさん……。お義兄おにいちゃんはまだ変わっていないんだわ」

部屋と家具を用意するだけでなく、衣装や下着まで揃えておこなって、なんて用意周到なのだろう。まるで私が同居することが、あらかじめ決まっていたかのようだ。

両親が再婚したとき、私の部屋を整えてくれたのは龍我だったことを思い出す。これはあのときの再現にも思える。

私の脳裏に、悪辣な傀儡師に操られる人形の姿が浮かんだ。

無力な操り人形は、傀儡師がいなければ頼れるだけ。

私は、義兄に操られる人形なのだろうか……

はっとして頭を振り、自らの考えを追い払う。

龍我は私のために尽くしてくれているのに、それを迷惑と思っではいけない。部屋に閉じこもっている、いろいろな悪い方向に考えてしまう。

引き出しを閉じた私は、アパートへ行つて荷物を取つてこようと思ひ立つ。

まだ昼だから、ストーカーと遭遇することはないだろう。龍我はマンションから出るなど命じていたけれど、危険なことは何もない。連絡先はわかっているのだから、あとで伝えれば大丈夫だ。

そう考え、靴を履いて玄関扉を開けた私の眼前に、堅牢な鳥籠型の門が飛び込んできた。

門の取っ手を握るが、押しても引いても開かない。ガシャリと、拒絶するような重厚な音が鳴るだけだ。

「開かない……どうして？」

見ると、アンティーク調の錠前が門扉に提がついていた。門には鍵がかけられているのだ。龍我が出かけるときに施錠していったらしい。

錠前には鳥の姿が彫られている。これも特注品のようだ。

オートロックと違い、自動的に開くという仕様ではないので、鍵がないと出られない。どこかに予備の鍵が置いてないだろうか。

玄関回りを探してみたけれど、それらしきものは見つからなかった。

「そうだ。お義兄ちゃんに聞いてみよう。名刺に番号を書いてくれていたわよね」

靴から自分のスマホと、もらった名刺を取り出す。

思えば、私から龍我に電話するのはこれが初めてだ。

学生の頃からスマホは持っていたけれど、龍我が毎日のように連絡してくるので辟易してしまい、就職してアパートに引っ越すときに機種変更して番号も変えた。友人とカフェで話している最中に、誰と何をしていると逐一報告を求められるのもうんざりしていた。母親が放任なので、その代わりに龍我が私の面倒を見ようとしてくれるのはわかっているし、ありがたくもあるのだけれど、彼の束縛に窮屈さを感じていたのだ。

コール音が一度だけ鳴り、すぐに『悠愛か』と龍我の声が聞こえた。まるで電話を待ち構えていたかのような迅速さに、慌てた私は咄嗟に言葉が出てこない。

「あ、あの、お義兄ちゃん、私……」

『悠愛。かけてくれると思ってたよ』

弾むような声音とは反対に、私は唇を尖らせる。

龍我が施錠して出かけたから、私は電話をかけざるを得なかったのだ。

甘くて優しい義兄の声を耳にした安堵とともに、反発心が湧き起る。

「お義兄ちゃん（にい）が門に鍵をかけてくれたせいで、マンションから出られないんだけど？ アパートに着替えとか取りに行きたいから、予備の鍵が置いてある場所を教えて」

そう言うと、龍我が溜息を吐く音が耳に届く。まるで耳元に直接呼吸を吹きかけられたような感触が走り、ぞくりと背が粟立つ。

『俺はマンションから出るなど、さっき言ったばかりだよな？ どうして堂々と外出しようとするんだ』

「だって……着替えを取りに……」

『着替えは部屋のクローゼットに入ってるだろ。心配しなくても、悠愛の私物はすぐに持ってこさせる』

「え……どうということ？」

『今、悠愛の住んでいたアパートの管理会社にいる』

「ええっ？」

仕事に行っただと思っていたのに、まさかそんな場所にいるとは驚きだ。

『手続きは完了したから。もう引越し業者は荷物の梱包と輸送作業を進めている。つまり、悠愛が自分で着替えを取りに行く必要はない。おまえが今日やることは、自分の行いを反省することだよ』

そのままプツリと通話が切られた。

もはやアパートの部屋の解約手続きは完了してしまったらしい。

龍我の手を煩わせたのは、私のせいだと反省を促され、肩を落とす。

そして、出ることが叶わなかった鳥籠型の門に背を向けた。

そのあととは無為にテレビを見て過ごした。

窓の向こうは次第に藍色に満ち、街の灯りが眩く煌めいている。

時計を見やると、午後六時を指していた。

「もうこんな時間か……。何か食べようかな」

アパートで朝ごはんを食べてから、何もお腹に入れていなかった。キッチンの冷蔵庫に食材はあるだろうか。

龍我は料理が得意で、実家ではよくチャーハンや春巻きを作ってくれた。遊び歩いて料理をしない母の代わりに、龍我が食事を用意してくれたのだ。義父は仕事が忙しく帰りが遅いので、ふたりきりで食卓を囲むことがほとんどだった。

けれど現在は社長として多忙な日々を送っているだろうから、自炊する暇はないかもしれない。パンでもあるかなと思ひ、ぴかぴかに磨き抜かれたシステムキッチンへ足を向ける。

そのとき、室内にインターホンが鳴り響いた。

「えっ、お客さん……？」

一瞬誰だろうと考えたが、この家を訪ねてくる人物に、はっと思いが当たる。もしかして、龍我の恋人だろうか。